二人のエジプト学者
—国際学会のひとこま—

加　藤　一　朗

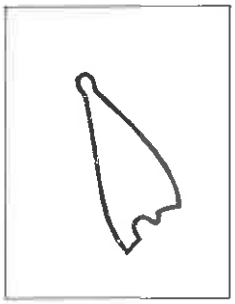
去る８月31日から９月７日にかけて、東京と京都とを開催地として、第31回国際アジア・北アフリカ人文科学会議が行なわれた。このような人文科学万般にわたる国際会議が開かれたのは、わが国では初めてのことではあるまいか。集った内外の学者の数は約２千人、発表者は延べ870人にのぼる大会議であった。当初筆者はひっそりと聴講者たちの末席につらなるつもりであったが、総裁三笠宮崇仁殿下のお言葉によって、殿下の統率するオリエント部会（９月１日）の副司会者の１人にえらばれ、とりわけこの日は部会の進行と発表者への質問などに全神経を集中した。発表は英語または仏語という規約があったが、参加者全員の言語的理解力が考慮されて、発表も質疑応答もすべて英語で行なわれたので、仏語に弱い筆者も辛うじて大役を果すことができた。会議名の中に北アフリカが加えられているのは古代エジプト文化の重みが第１の理由であることはいうまでもない。海外から参加したエジプト学者（エジプトロジスト）は２名、フランスのJ.ルクラン教授とポーランドのK.ミスリーヴィーツ教授とであった。おふたりとも他の部会でも発表されたが、紙面の都合もあり、オリエント部会——会議全体の中では第２部会と位置づけられていた——における両教授の発表の模様を——簡略化しつつではあるが——お伝えしたい。

A

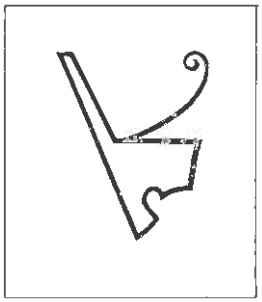
部会全体としてのテーマは「古代中近東における君主国と社会的・宗教的伝統」であった。先に発表されたミスリーヴィーツ教授の題目は「古代エジプトの神と王との同定（アイデンティフィケーション）の図像的・文学的・政治的諸相」で、多くのスライドを用いて立論された。（スライドをお借りして写真版を作る時間的余裕がなかったので、同教授の諒解のもとに、ここにはスライドと同種の写真２葉を教授の論文の中から転写することにする。）さて、エジプトは多神教の国であり、王（ファラオ）の化身とされた神がみもホルス（タカ神）、ハゲタカ女神、コブラ女神等々決して単一ではない。では教授は題目の中で「古代エジプトの神（God）」とされ、なぜ「神がみ（Gods）」とされなかったのか。教授の主張はこうであった「王が種々の神がみと合体していたことは知っている。しかし、ヘリオポリスを聖地とする造物神アトゥムこそ王と同定するのにもっともふさわしいのである。王はアトゥムであり、アトゥムは王であったのだ。このアトゥムの姿（写真A）こそはまさしく典型的な王の姿であって、上エジプト王としての白冠（図a）と下エジプト王の赤冠（図b）の合わさった二重冠をいただき、王特有のスカートをはき、王者のしるしであるライオンの尾までうしろにたらしている。王とのちがいは、頭上に象形文字でアトゥムと書いてあることと、真直（まっすぐ）な王のあごひげに対して下端が上にそりかえった（神としての）あごひげをつけていることだけだ」と。このあと教授はピラミッド・テキスト（後述、また以下PTと略称する）などを引用して、アトゥム神と王との同定を縷々（るる）説明され、最後にうなぎの姿をした珍らしいアトゥム神（写真B）を披露された。この場合でもうなぎの前に二重冠をいただく人頭がそえられてアトゥムが王であることを示しており、写真全体を見渡すとかまくびをもたげたコブラ（王の１化身）を連想させる。教授の発表後ルクラン教授から「アトゥムの言語学的意味をどう考えるか」という質問がなされた。それに対する答えは「アトゥムの意味については２説ある。その１つはall（全）、perfection（完全）と解釈しており、も１つはnothing（無）と解している。自分としては前者に従いたい。なぜなら、自分自身を創造し、天地を創造し、人間を創造し、神がみを創造した造物神アトゥムには完全さがふさわしいと思うからだ」というものであった。私事にわたって恐縮

であるが、この発表の中で筆者が非常な感銘をうけた点が1つあった。それは、エジプト史の研究にあっては、出土史料の多寡ということもあって、従来上エジプト（カイロ以南）の研究に重点がおかれすぎていたきらいがあったのにたいして、教授の発表の中に下エジプト（ナイル・デルタ）の重要性の強調がかいまみられたことである。この点こそは筆者がここ数年来思考し、不充分ながら発表もしてきたことと一致していたのである。筆者は宗教都市ヘリオポリスが下エジプトに属することを重視してきたのであったが、教授は政治都市(古王国の都)メンフィスをも下エジプトに属するものと見なされていた。いいかえると、古王国は下エジプトを基盤とした勢力であったということになるのである。これは筆者にとって全く新らしい見解であって、今後の筆者の研究に大きな指針となりそうである。

続いておこなわれたルクラン教授の発表の題目は「PTに関する新らたなる研究」であった。PTとは古王国に属する第5・6王朝の諸ピラミッドの中に刻まれた、死後の王の安寧を約束する呪文集で、世界最古の大宗教文書といわれるものである。同教授は戦後フランスから派遣されたエジプト遠征隊に参加された折、第6王朝のペピ1世とメレンレー王のピラミッドの内部に残されていたPTの断片をたんねんに収集・整理・復元されており、やはり多くのスライドを用いて復元の過程を詳細に説明し、同テキストについての該博な知識を披露された。教授は本来ナイル上流地域（ヌビアおよびスーダン）の遺跡・遺物（とくに、エティオピア王朝とよばれる第25王朝のもの）の研究家として著名であるが、エジプト史全般にわたって造詣が深く、現在フランスのエジプト学者の中の第一人者であり、本部会では部会としてのテーマにあわせてPTの話をされたわけであった。教授の発表後、今度はミスリーヴィーツ教授が「PTはエジプト最古の文書の1つであるが、各語の複数形はどのように表記されているか」という質問をされた。答えは「ヴァラ



a



b

エティにとんでいる。名詞を表わす象形文字を3回連ねる方法、象形文字のあとに3つの点を描く方法、3つの点の代りに3本の棒線をひく方法、この3つの方法が混用されている。この混用については、エジプト人が限られた文脈の中で同一の表記法をくりかえすことを好まなかったということがいわれている。しかし、時がたつにつれて、複数の表記法も次第に組織化されていったようである」というものであった。筆者にとっては、PTとコフィン・テキスト（中王国時代を中心に貴族や富者の木棺に書かれ、彼らの来世の安寧を祈った宗教文書）と「死者の書」（新王国以降一般人の墓の中におかれた同種パピルス文書）という3つの宗教文書の間の関係がもっとも知りたいところであったので、部会終了後、この点について教授に個人的にたづねた。教授は「3文書ともそれぞれの研究がまだまだ充分とはいえない。それゆえ3者の関係の解明にはさらに一層の時日を要しよう」と答えられた。

B